

イラクとパレスチナから考える 『テロとの戦い』

— 市民としてどう向き合えるのか



アメリカがテロとの戦いを掲げて始めたイラク戦争から20年が経ちます。米国のバイデン大統領は、10月7日に始まった Hamas とイスラエルの戦争に、イスラエル側に立ちながらも「アメリカがイラクで犯した過ちは繰り返してはいけません」とも言っています。パレスチナとイラクの状況が密接に関係していることに注目しつつ、25年前からこの地域に NGO という立場で関わってきた佐藤真紀氏が現場で体験したことを紹介しながら、過ちを繰り返さないために市民として何ができるのかを議論します。



講師 佐藤 真紀 (国際協力アドバイザー)

1985年に早稲田大学理工学部応用物理学学科卒業後、(株)ブリヂストン入社。研究所勤務中に休職し1994年に青年海外協力隊でイエメン、シリアに赴任。1997年～2002年まで日本国際ボランティアセンター現地代表としてパレスチナに駐在。2003年にはイラク戦争で緊急救援を指揮。その後劣化ウラン弾の放射能が原因と思われるイラクの小児がん支援のNPO法人JIM-NETを立ち上げる。2019年からは、国際協力アドバイザーとしてNGOをサポートしたりイベントを企画。多摩大学で教鞭をとる。またアーティストとしての作品発表も行なっている。

司会 石井 正子 (アジア地域研究所所長・本学異文化コミュニケーション学部教授)

2024年1月10日(水) 17:10～19:00
立教大学 池袋キャンパス 15号館 M302 教室

<申し込み>

右のQRコードからお申込ください (定員 先着100名)



お問合せ：立教大学アジア地域研究所 (E-mail:ajiken@rikkyo.ac.jp Tel:03-3985-2581)